剣と魔法と戦争の世界

laceprnd3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣と魔法と戦争の世界

【Ｎコード】
Ｎ７８３６Ｙ

【作者名】
ｌａｃｅｐｒｎｄ３

【あらすじ】
三国間の戦争で最も活躍した男は、隠遁生活中に古傷が原因で命を落としてしまう。そんな彼の子供である二人の主人公は、傭兵になって、三国間の情勢を揺れ動かす。

設定と主人公（前書き）

ブラインドタッチができない（泣）

設定と主人公

三つの大国、アルテリア、リゼルト、ダマスク。
それら三国の大規模な全面衝突は、三大国家大戦争と呼ばれた。
そして、その戦いで最も多くの戦果をあげた男であるサンド・グラントリングは、アルテリアの最大戦力、ゴールドドラゴン「デーメーテイル」を撃破したのを最後に、戦場から姿を消した。
戦いに疲れ、敵をひたすら倒すことに飽きた彼は、三国のどれにも属さない中立国家「霧影」で隠遁生活を送る。
そこで出逢ったレム・リープクラフトと身を結び、二年の歳月が過ぎた頃。
本人もそのときまで完全に忘れていたこと。
最後の戦いで負った、ゴールドドラゴンの尻尾による攻撃。
ゴールドドラゴンの尻尾には猛毒がある。即効性で、少量でも簡単に人が死ぬ猛毒が。
彼は自身の強力な免疫能力によって毒は完全に分解されたと思っていた。思い込んでいた。
だが、その毒はある日突然牙をむく。
戦場を離れて久しい彼の体は、全盛期の機能でやっと対抗できていた毒に蝕まれ、弱っていった。
周囲の人間の必死の看病も、人知を超えたドラゴンの叡智にかなうはずもなく、彼は多くの嗚咽と慟哭の中、息を引き取った。
それから十二年が過ぎた頃。
彼の息子と娘はたくましく育っていた。

グシャァッ！
生々しい音とともに、全長五メートルはあろう巨人の腹に穴が開く。
「ガ・・・アァッ！」

寄声を発しながら、巨人は自分の腹に大穴をあけた張本人、シャミア・グラントリングを蹴り飛ばそうとした。
その攻撃を全力の横っ飛びで回避したシャミアはとどめをさそうと剣を握る手に力を入れる。
が、巨人は振り切った足でバランスを崩し――そのまま地面に倒れこんだ。
「ガ・・・ァ・・・」
力のない声、というかうめき声をあげて、巨人は動かない。
「・・・・・・」
シャミアは慎重な顔つきで、巨人の体に歩み寄ると、持っていた剣の切っ先でつんつんとつっついている。
数回それを繰り返したあとで――
「・・・やったぁあああ！」
歓喜の叫び声をあげた。
「やったやったー！これでついていってもいいよね、リゼル！」
満面の笑みで、木にもたれかかって様子を見ていた僕――リゼル・グラントリングに声をかけてくる。
「ああ。まさか本当にこいつを倒しちまうとはな・・・」
軽く首肯しつつ、僕は今朝こいつと交わした約束を思い出す。
「え、リゼル傭兵になるの！？」
「ああ、父さんが就いていた職業がどんなものなのか、興味があってな」
「へー。まぁがんばってね。応援してるよー」
「してるようには思えない口ぶりだがな。・・・まあいい、早速明日傭兵派遣所に発つから準備しないと」
「ん、どっかいくの？いつごろ帰ってくる？」
「派遣所はめっちゃ遠いし、この村ももう飽きたから、二度と帰ってこないよ」
「は！？」
「ちょうど前から独立したいと思ってたしいい機会だ。アルテリア

にでも移住することにするわ」
「私もついてく！」
「なんでだよ。それについてきたところで、傭兵稼業は安定した収入がないからお前の面倒まではみきれないぞ？」
「大丈夫だよ！私も傭兵になるから！」
「無理無理」
「どうして！」
「お前弱いじゃん。雑魚じゃん。せめてオーガくらいは倒せるような実力がないと稼業開始一日で廃業すんぞ」
「・・・じゃあオーガ倒したら一緒にいっていい？」
「ああいいぜ。けど俺は一切手伝わないからな。一対一で勝った場合のみつれてってやるよ」
回想終わり。現在ではシャミアが達成感でいっぱいの顔で、笑いながらとびはねている。
それにしても、予想外だ。
僕の予定としては、オーガに殺されそうになっている危険な状況で僕が颯爽と助けに入り、シャミアの心に戦闘の怖さを刻み付けてやろうとおもったんだけど。どうしてこうなった？
一週間前、こいつ確かリトルベアに負けそうになってたよな・・・？
我が妹ながら、驚異的な上達の早さだ。
やれやれ、僕が渋ったのはなにもお前が弱いからってだけじゃなかったのによ。
だが約束は約束。僕は妹とそろって、明日傭兵になる。
「もうどうにでもなっちまえ」
投げやりにつぶやく。シャミアが勝利の余韻からぬけだして、
「なにが？」
と聞いてきた。
「なんでもねーよ。さ、早く帰ろうぜ。お前も明日の準備しなくちゃだし」
そう答えると、シャミアはいっそう嬉しそうに、「うん！」とうな

ずいた。

戦闘前

父が死んで十余年。僕とシャミアが八歳のときに母も死んだ。
僕らが住む霧影は深い森の中にあって、後方は切り立った崖、そのはるか下に河が流れているといった具合だ。
一見不便なように見えるこの地形は、実際は地下水が豊富、崖の中腹辺りにある洞窟からは希少な鉱物資源が大量に取れる、森には果実がなる木や野生動物がいて食料には困らない、などなど人が住むにはうってつけな地域となっている。
こんなにも恵まれた土地がなぜ六年前大戦争をやらかした、強大な軍事力を持つ三国に侵略されないのかというと、霧影が三国の主な戦場から大きく離れているため戦略的価値が低いことと、それをさしひいてでも価値のある鉱物資源の存在が知られていないからである。
そんなこんなで、三国は「威厳を示すために侵略するのもいいけどそこまでやらなくてもいいよね」みたいな感じで、ほとんど不干渉を決め込んでいた。
が、しかし霧影にとって脅威なのは何も三国だけではない。それは森に住む魔物だ。
たまに森の果実や動物の味に飽きた魔物が人肉をもとめて霧影に侵攻してくる。そのなかには極まれに滅茶苦茶つよいやつも含まれているわけで、僕らの母親であるレムはそいつに単騎勝負をいどんで死んだ。
とある満月の夜、母は唐突に「ちょっと散歩に行ってくるわね」といって家を出た。もともと夜に森で一人月を見ながらのんびりするのが好きな人だったので僕とシャミアは特に不審にも思わずにそれを見送った。
あまりに遅かったので心配して二人で森にいく。そこで目にしたのは大量の狼の死体にのなかに横たわる母の姿と、一際大きな体躯を

持つ狼が足をひきずって逃げようとしている光景だった。
そこからのことはよく覚えていない。気がついたら母の死体をかついで泣きじゃくるシャミアと一緒に村にむかっているところだったんだ。後からシャミアに聞いた話によると、僕は巨大狼にとどめを刺したあと、母の死体のそばにうずくまってワンワン泣いたらしい。今更かんがえても詮無いことだけど、母は多分、あの巨大狼の魔力をひそかに探知、村人や僕らでは手に負えない相手だと判断し、一人で撃退に向かったんだろう。
母のおかげもあってか、あれから侵攻してくる魔物はめっきり減った。月に二三回程度、オーガやなんかよく分からない巨大蛇などの強力なのが攻めてくる程度。オーガは今日シャミアを試すのに使った、もはやおなじみとなっている感のあるやつだ。
…なんて、説明口調になって現実逃避にはしったところで状況は何一つ好転しない。
今は目の前、というか僕の四方を取り囲んでいるオーガの群れと前方の黒い男に意識を集中させるべきだろう。
気持ちを切り替えた。
満月の夜、森の中。オーガの群れ。
正面１０メートルくらいのところに黒いフードつきのローブをまとった男がたたずんでいる。
「まさかあの怪物に子供がいるとはな。いやそれよりも奴が死んだことに驚くべきなのだろうか」
黒い男がつぶやく…あれ？なんで僕が父さんの子供だと知っているんだ？
「なに、君の精神に少しばかり干渉して心を読んでいるにすぎない。そんなに警戒しなくても大丈夫だ」
僕が気付かれない程度に少しだけ警戒したこともお見通しか。どんな手を使っているのか知らないが更に警戒を強めざるをえないな。
「ふむ。まあそれが当然の反応だろう。だめもとでいってみただけだしな」

何の目的でここへ？移住したいのならこのオーガの群れをどこかへやってくれないか。
「人と話すときはちゃんと声を出せ。失礼だぞ」
男の声が不機嫌なものへと変わった。
失礼といえば、この人のほうが明らかに年上なのに敬語をつかわないのも失礼なんだけど。
まあ細かいことはいいか。
「これは失礼。改めて、なぜここにきたのですか？」
結局敬語を使った。礼儀を重んじろ、は生前の母がいつも言っていたことだからな。
「任務だ。私は傭兵でね、最近まことしやかに囁かれている「サンド・グラントリング死亡説」の真偽の確認にきたんだ」
・・・！傭兵ときたか。となるとこの人は将来の先輩ということになるのか。
「意外ですね。傭兵ってそんな地味な仕事も請け負うんですか」
「まあ依頼内容はピンキリだ。暗殺や殲滅などの派手なものや探索・調査とかな。今回は後者…かつ前者だ」
「？」
僕はまゆをひそめた。この武器も持っていない、微弱な魔力しか感じられない男が暗殺に殲滅？どう考えてもそれは人選ミスというものだろう。
「早計だな。なにも私がやるとは一言もいってないぞ？」
男がにやぁ、と意地悪く唇をゆがめた。気がした。フードに隠れて口元どころか顔も見えないけど、口調から十分に察せられる。
「付け加えておくと、私たちは噂の真偽の確認とともにもう一つ追加で依頼を請け負っている」
男は楽しそうに続けた。…うわー絶対笑ってるよコイツ。つーかもういやな予感しかしないんだけど。
「噂が真実だった場合は霧影を占拠、抵抗するものはすべて排除してかまわない。ガセだった場合、つまりサンド・グラントリングが

生存していた場合は村にいる彼以外の戦力を追加で調査しろ。という依頼だ。」
予感的中。そんなこったろーと思った。
分からないことがあるけどひとまずそれは置いといて。えーと、今のこの人の言葉から判断するに、今結構やばい状態なんかな？
「ああそうだ。今頃私のパートナーが村を蹂躙してるころだろうな」
「ですよねぇー」
僕はほとんどやけくそ気味で、天を仰ぎながらそういった。
ああ、なんてこった。ここからじゃぁどれだけ急いでも二十分はかかっちまう。
村にいる現役の傭兵に対抗しうるだけの戦闘能力を持った者といえば、今では僕と…シャミアくらいしかいない。
シャミアも最近ようやく力をつけてきた程度のものだから、対抗できるといってもやはり頼りない。
やばいぞ…本当に何の偽りもなくただ純粋にやばいぞ…
「いいじゃないか、別に。君はどうやら霧影に対してそれほど愛着をもっていないようだし」
「…そんなことまで分かるんですか」
苦々しげにつぶやいて僕は視線を男に戻した。
「別に僕はいいんですよ。あんな国とは名ばかりの小さな集落どうなろうがしったこっちゃない。けど僕の妹がね…どうしようもなくあの村が大好きなんです」
「シャミア、とかいうやつだったか」
「はい。僕は妹が大事で大好きだ。だから、あいつが好きなものを、守らないわけにはいかない」
無感情にそう説明すると、男は乾いた笑い声をあげた。
「ハハ…かっこいいなぁ…まさに兄妹愛。泣かせる…。じゃあ速く行ってやれよ。今ちょうどうちのパートナーが見慣れない魔力と衝突したところだ。急がないと手遅れになるぞ」
「！　分かりました。色々教えてくれてありがとうございます」

わざわざ自分の身分や依頼の内容、現在の状況まで事細かに解説してくれた男に感謝しつつ、僕はきびすをかえして村に戻ろうとした。
戻ろうとしたところで。
自分の真後ろに大量のオーガが道をふさぐように、殺気をみなぎらせて立っているのが目に入った。
ゆっくりと男をにらむ。
「…ちょっと」
「どうした？速く行かないと手遅れになるぞ？ああ、あと一応追加で説明しておくと、俺の役割は魔力をちらつかせて村の戦力を釣り、可能な限り足止めをすることだ」
くつくつと、男はくぐもった笑い声をあげた。もしかしたら忍び笑いのつもりなのかもしれない。
「くくく…さあ行けよ。いけるものならな」
森がざわめき、男の後ろから大量の魔物が這い出てきた。
今まで見たことがあるもの、ないもの大量に…
完全に囲まれてしまった。
なんて……燃える状況なんだろう。
ぼくは一つの事柄を、楽しそうに宣言した。
「ＯＫ。全員ぶっ殺してやる」
深夜の森で、大乱闘が始まった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7836y/

剣と魔法と戦争の世界

2011年12月18日10時56分発行